

仲間を支えられた、それぞれの未来



創立150周年を迎えた大谷中学・高等学校。その節目に集ったのは、野球部で青春を共にした二人の卒業生だ。一人は20代で起業し、世界270拠点に展開する会社を率いる伊井田栄吉さん（写真右）。もう一人は、早稲田大学野球部を経てトヨタ自動車硬式野球部で活躍した佐々木雅次さん（写真左）。

ビジネスとスポーツ、異なる道を歩んだ二人に共通するのは、高校時代に育まれた「チームと仲間」の大切さ。節目の年に二人が語る高校時代の記憶と、そこからつながる現在、そして未来へのメッセージとは。

期待を背負い、六大学から社会人野球の道へ



佐々木さんと早稲田大学野球部との縁は今も続き、マネジメントや野球界と社会をつなぐ活動を担っている。

——佐々木さんはその後、大学、社会人と野球を続けられました。

佐々木雅次（以下、佐々木） 高校に入学してすぐの頃は野球の練習で毎日くたくたで、テスト勉強なんて全然していませんでしたが、ちゃんと勉強をし始めたら成績が上がってきて。その頃の野球部の顧問だった氷見一雄先生から、「東京の大学に行くなら知人を紹介してあげるよ」と、早稲田大学野球部の大先輩・長船駿郎さんにご連絡をいただき、氷見先生からの紹介状を持って、単身で早稲田大学野球部のセレクションに行きました。夏の大会が終わった直後で体にパワーが有り余っている時期だったので、10スイングのうち5本をフェンスに直撃させたんですよ。ピッチャーとして行ったのに、その場で「バッターに転向しろ」と言われたくらいで。そこで、「しっかり勉強をして、改めて受けなさい」と言ってもらったので、早稲田一本に絞ったんです。親も学業をサポートしてくれたので、なんとか合格することができました。

——セレクションだけでなく、しっかり受験をして早稲田へ行かれたんですね。

佐々木 はい。高校時代に野球と勉強を両立できたことは大きかったですね。

伊井田栄吉（以下、伊井田） 僕らにとっても、佐々木が早稲田に入ったというのは誇りでした。六大学に仲間が行ったというのは、チーム全員の喜びでしたね。

佐々木 僕が早稲田に入ったときの同期が、いま早稲田大学野球部で助監督を務めている 金森栄治くんなんです。さらに、1学年下には素晴らしいバッターで元阪神タイガース監督の岡田彰布くんがいました。そんな仲間たちと一緒にプレーできたのは幸運でしたし、4年生最後のリーグ戦で優勝し、ベストナインも獲得できたので、本当に良い時間でしたね。

——その後は、社会人野球へ進まれたんですね。

佐々木 大学卒業後にトヨタ自動車に入りました。今は社会人野球でもトップクラスの強豪ですが、当時は仕事優先のチームで、昼間に8時間働いて、そのあとに夜のナイターで3時間ほど練習をして、翌朝には都市対抗の予選試合に出る。そんな日々でした。それでも会社の人事からは「勝て、勝て」と言われて、もう勘弁してくれと（笑）。その度に会社とぶつかって、野球部をクビになりかけたこともありましたが、そのやりとりがきっかけで環境が少しずつ改善されていって、昼間にも練習時間が取れるようになりました。

2004年にトヨタ自動車野球部部長に就任後、スカウトも経験し、2007年に日本社会人野球選手権で初優勝、2008年、2010年と3回の優勝を経験しました。部長退任後、選手権は通算7回、都市対抗野球大会は12年連続出場、2回の優勝を誇る社会人野球の強豪チームに成長しています。そのチームが強くなるきっかけ作りに少しでも関われたことが私の誇りです。

——仕事も野球も全力でというのは、高校時代から文武両道だった佐々木さんならではのですね。

佐々木　そうですね。仕事もしっかりしてきましたし、トヨタ自動車にも徹底した文武両道の考え方がありました。ただし、中途半端な文武両道では勝てないと思っています。スポーツを強くするなら、その分、学業もきちんとする。そういう姿勢を持ち続けてどちらも高めていくことが大事です。これは今でも変わらない信念ですし、大谷高校にもぜひそうあってほしいと思います。

野球で学んだ「仲間づくり」を土台に起業



創業から45年が経った今も依然としてベンチャースピリットを掲げ、会社の成長だけでなく、自身の経済人としての歩みも止めることはない。

——伊井田さんは今、大きな会社を率いていらっしゃいますが、どのような道のりを歩まれてきたのでしょうか。

伊井田 佐々木の話を聞きながら「やっぱり野球が好きだったんだな。幸せなやつやなあ」と思っ
てね(笑)。僕も幸せなんですよ、好きな事業をやっているから。ただ、僕の場合は高校の夏の大会
が終わった時点で、野球はここで終わりと自分の中で区切りをつけました。最後まで試合に出
られたのはうれしかったけれど、それ以上を目指す力はもう残っていなかった。

——ビジネスの道へ進むきっかけは何だったんですか？

伊井田 卒業後にしばらくフラフラしていたら、家を追い出されて(笑)。その流れで九州に渡
りました。大学には行きませんでした。当時はYMCAのビジネススクールに通い詰めて、資格
を取ったり、学びに来ていた社会人と交流したり。その仲間づくりが、のちの創業につながって
いったんです。スクールには6年ほど通いましたが、そこに集まっていたのは「もっと成長したい」
という意欲的な人たちばかりで、会社の創業メンバーになってくれた人もいます。最初は僕ひとり
でしたが、すぐに1人、2人と社員が加わり、その中には後に今の会社を支えてくれた番頭役もい
ました。気づけばもう45年前の話ですね。あのときに出会った仲間が、会社の基盤を作ってくれ
ました。



伊井田さんが書いた社訓。「親や学校から教えられた当たり前のこと」だというシンプルで力強い言葉が、世界270ヶ所の拠点すべてに掲げられている。

——やはりここでも、「仲間」が土台になっているんですね。

伊井田 そうですね。僕は怪我が多くて、冬はほとんど練習できず、試合の直前だけ復帰するようなこともありました。それでも誰ひとり「サボっているのに」という文句を言う人はいなかったんです。あれはまさにチームワークですよ。だから、僕の人生は「仲間づくり」そのものだと思います。仲間がいなければ何もできない。それは社会に出ても、ビジネスでも同じでした。久しぶりに佐々木と会っても、何十年ぶりという感覚が全くなくて、あの頃の延長のように話せる。そんな関係が残っているのは本当に幸せだと思います。

——本当に素敵な関係性ですね。

伊井田 だからこそ、仲間と飲んで過去の話をするのは楽しいはず。それでも、さっき言ったように同窓会に行かないのは、僕自身はまだ現役の事業家で、過去よりも未来を優先したいからなんです。会社の仲間と未来をつくるのが、今の自分には大切ですから。佐々木にも、「同窓会は引退してから行くよ」と言っています。今はまだ、事業というフィールドの中で、日本の経済や若い世代の未来をどうつないでいくかを考えることが僕の使命だと思っています。

高校時代、僕らのヒーローは佐々木でした。プロに行ってほしいとも思っていたましたが、彼は社会人野球で大きな足跡を残した。僕は事業の世界で同じように役割を果たしたい。これはどちらも、大谷高校で培った仲間との絆が原点だと思います。

ひとりで抱え込まず、自信を持って未来へ挑んでほしい。



進んだ道は違えど、その原点には高校野球で培った「仲間を信じ、チームで戦う」姿勢がある。

——仲間がのちにどれだけ自分を助けてくれる存在であるか、教えていただいた気がします。最後に、今まさに人間関係や進路で悩んだり迷ったりしている若い世代へ伝えられることがあれば、お二人からメッセージをお願いできますか。

佐々木 僕自身、実は高校に入るときは野球についていけるか不安でした。みんなにはあまり言っていませんでしたが、体力に自信がなくて、怪我也多かったです。でも、中学時代にバッテリーを組んでいた北澤誠一くんと一緒に大谷に来てくれたこと、そして、伊井田たちと仲間になったことで、一人じゃないと思うことができました。仲間がいるだけで、下を向いていても「がんばらなあかん」と奮い立たせてもらえるんですよね。だから、やっぱり一人で抱え込まないことが一番大事だと思います。

今の時代はスマホの普及もあり、どうしても個人主義に傾いてしまったり、ひとりで抱え込んでしまったりすることが多いのではないのでしょうか。でも本当は、仲間と関わることでしか得られない力があるんです。迷ったり、悩んだりしている子に声をかけられる存在——そういう仲間を持つことが、これからのリーダーシップにつながると思います。

——「仲間」というのは、ただ親しくなるというだけではなく、いろんな場所、場面でつくることができますよね。

佐々木 そうなんです。僕も現役のころ、平安高校のピッチャーをライバル視して、「あいつがノーヒットノーランをしたら、こっちもやらなあかん」と自分を奮い立たせた経験がありました。そういう比較対象やライバルは、一人では決して生まれません。仲間や相手がいるからこそ、自分を伸ばしていける。だからこそ、まずは仲間を作ってみてほしいですね。そして、たくさん会話をして、議論して、刺激をもらい合うこと。その積み重ねが必ず、自分を成長させてくれて、社会に出ても大きな力になるはずですよ。



対談終了後も話が尽きることはなく、次の再会を約束して固い握手を交わす。

——伊井田さんからはいかがでしょうか。

伊井田 まず、大谷中学・高等学校の創立150周年というのは本当におめでたいことだと思います。先生方のおかげで、この150年の間に多くの生徒が社会へと巣立っていった。その積み重ねはすごいことですよね。

そこで僕から伝えたいメッセージとしては、やはり「日本という国を意識してほしい」ということです。いま世界は戦争や政治の不安定さのなかで、経済も大きく揺れています。そんな時代だからこそ、私たち日本人が大切にしてきた「和」の文化、人と人との間合いを大切にする姿勢を忘れてはいけないと思います。仲間を尊重し、静かに見極め、正しいものは正しいと貫く——そういう日本的な価値観が、これからの社会でますます必要になるはずです。大谷高校での学びのなかには、そうした「和」の精神や、先祖から受け継いだ道徳がたくさん息づいていると思います。それを基盤にして、自分が何者かを見つめ、社会へ、そして世界へ羽ばたいて行ってほしいですね。

——まさに大谷ならではの精神ですね。

伊井田 私自身も仲間の佐々木に支えられ、先生や親から学んだものをそのまま社会で実行してきただけで、特別なことをしてきたわけではありません。でも、大谷で学んだものを胸に、経済人として役割を果たしてきたつもりです。今の時代は見通しがききにくくなっています。だからこそ、自分たちの足元を確認し、大谷で学んだことを土台にして、品格ある人間として社会で活躍してほしい。私自身も、卒業生として恥ずかしくないように、最後まで役に立てる人間でありたいと思っています。若い皆さんには、ぜひ自信と誇りを持って未来に挑んでほしいですね。



<PROFILE>

伊井田 栄吉 **Eikichi Iida** (左)

京都府生まれ。大谷高校野球部で培ったチームワークを礎に、1981年に第一創業として株式会社ミクニを設立し、1993年に第二創業として現在の株式会社ワールドホールディングスを設立。人材・不動産・新規事業を多角的に展開し、世界270拠点に広がるグループ企業へと成長させた。現在も現役の事業家として、「仲間」「心」「和の文化」を重んじる日本独自の価値観を基盤とした企業経営を続けている。

佐々木 雅次 **Masatsugu Sasaki** (右)

京都府生まれ。大谷高校野球部ではエースで4番を務め、チームの中心として活躍。高校卒業後は早稲田大学に進学し、野球部在学中にリーグ優勝も経験した。その後、トヨタ自動車硬式野球部に入部。海外業務なども経験し、仕事と野球の両立を実践。引退後も社会人野球界の発展に携わり、現在は大学野球のマネジメントや後進の指導を続けている。

Interview & Text: Asako Saimura

Photo: Ayumi Yamamoto